

21世紀プログラムの評価

— 卒業生の追跡調査結果から —

Evaluation of The 21st Century Program
a follow-up survey on graduates

九州大学高等教育開発推進センター・教授 副島 雄児
九州大学高等教育開発推進センター・助教 田尾周一郎

Center of Research and Advancement in Higher Education, Professor Yuji SOEJIMA
Assistant Professor Shuichiro TAO

キーワード：21世紀プログラム，卒業生追跡調査，教職連携

Keywords: The 21st Century Program, follow-up survey on graduates, collaboration between academic and administrative staffs

1. はじめに

九州大学21世紀プログラム（以下，21cp と略記する）は「21世紀を担う人材の育成」を目標として，平成13年（2001年）度にスタートし，平成22年度終了時点で満10年を迎えた。この間，総数249名の入学生を受け入れ，156名の卒業生を輩出している。21cpの学生は4年制学士課程の学生であり，本学4年制課程10学部（文学部，教育学部，法学部，経済学部，理学部，医学部保健学科，薬学部創薬科学科，工学部，芸術工学部，農学部）のいずれかに管理上の学籍をおく。しかし21cp学生の教育は，各学部からの付託を受ける形で21世紀プログラム専門委員会の責任の下で，一括して実施している。

21cpでは，21世紀を担う人材を次のように考えている。知的な大人にふさわしい社会的教養を持つとともに，現代社会のあらゆる重要課題についてその重要性をいち早く認識し，それについて自分の頭で論理的に筋の通った意見を主体的に形成し，それを他人（外国人を含む）と交換し合うことを通して，さらに深めてゆくことができる人材，すなわち高い知的ポテンシャルティー（自分を知的に高めてゆく能力）を備えた人材である。このような人材像を「専門性の高いゼネラリスト」と表現している。学生には，卒業までにそうした高いポテンシャルティーを身につけることを強く期待している。そのため，教育面では九州大学の全ての講義を履修可とするとともに，学生が選択した履修科目の適切性・体系性を保ち，且つこれらを補うために21cp独自科目も開講している。入学者選抜ではそのような人材となる素養を備えているかを判断するため，きめ細かい審査が可能なAO入試を採用している。

平成22年度には第2回の自己点検・評価及び外部評価を実施した。自己点検・評価を実施し，外部評価を受けることは，21cpの成果や課題を明らかにしその教育理念や教育体制を検証するためには必須であった。これら評価は平成17年度に実施された第1回の自己点検・評価及び外部評価に

続くもので、この10年間で総括するものと位置付けている。また、21cpの次の10年間の指針を定めるためにも重要な意味を持つ。

21cpはその教育理念の斬新さとともに、それを実現するための特徴ある選抜方法と教育実施体制を採っているため、開始当初より内外の注目を集めてきた。また、文部科学省が平成15年度に開始した「特色ある大学教育支援プログラム」（いわゆる特色GP）の採択も受けている。このように社会からの負託を受けて実施されているプログラムであるため、21cpの動向を内外に明らかにすることは、高等教育実施機関としての社会的責務であるとも言える。

そのような検証作業の一環として、平成18年度より卒業生の追跡調査を行い、21cpを卒業した学生が、他大学（進学した場合）や会社等（就職した場合）でどのように評価されているのかを直接の聞き取り等によって調査し、卒業生の社会的評価を探ってきた。従来型の大学院学府を併設する学部においては学内進学率が高く、卒業生の動向が直接つかめるため、本稿で紹介するタイプの進学者に対する調査は日常的に行われていると考えてよい。また、学部卒業生が他大学大学院に進学した場合においても、学会活動などを通じて、卒業生の動向はある程度つかめるため、改めて調査を行う必要性は高くないと思われる。一方、21cpは4年制の学士課程のプログラムであり、大学院学府を併設していない。また卒業生の進学先や就職先はそれぞれの専門領域に従って多岐にわたり、さらに進学先については他大学への進学率が高いということもあるため、意識的に調査を行わない限り卒業生の社会的評価を把握することは難しかった。

以上のような理由によって始めた調査であるが、教職連携を意識した調査手法やそこから得られた知見の在学生へのフィードバックなど、一般の学部教育においても参考になることが多いと考える。本稿では、21cpの社会的評価をまとめるとともに、調査の方法やその分析結果、及びその波及効果についても報告する。

2. 調査の方法と内容

21cpの成果と課題に対する調査の一つとして、大学院へ進学している場合は在籍大学院における指導教員に対して、企業等に就職している場合は直属の上司等に対して、アンケートと訪問によるインタビューを実施し、外部から21cpを見た場合の生の声を聞くこととした。以降、調査を行う指導教員や上司等を“調査対象者”，調査の対象となる卒業生を“調査卒業生”と呼ぶことにする。

調査対象者には、訪問前にアンケート用紙を送付して事前の回答記入を依頼し、訪問インタビュー時にはその回答に沿って意見収集を行う形式とした。

アンケートでは定量的なデータ処理を可能とするため、5点満点評価による点数評価が可能な30項目を設定している。30項目の内訳は、Q1～Q20が一般的な項目、Q21～Q30が21cpに関する項目として分類し、前者は、一般的に学士課程修了時に期待される素養を、後者は、特に21cpの教育理念に照らし合わせて期待される素養を挙げている。これらは、21cpの学士課程修了時に身につけるべきと期待する、いわゆる“アウトカム”に関する項目として位置付けている。アンケート用紙をこの報告末尾の資料 に掲載した。

記述式回答では、訪問時のインタビュー調査を想定して、調査対象者の所属機関に21cp学生が

応募していることを知った場合の注目の有無、対象者の（個人的な）関係者が21cpに関心を持った場合の対応など、何らかの形で21cpとの関わりが生じる場合を想定した時の対応について意見を求める形とした。

平成22年度までの調査卒業生の属性、訪問調査の対象者所属機関、調査者（訪問調査を行った教員・事務職員）は表の通りである。第1期生の卒業年度は平成16年度で、第1期生卒業2年後に調査を開始した。大学院進学（修士課程在籍）の場合は卒業後2年目に、一方、企業等への就職の場合は、正確な評価を得るために、おおよそ就職2年目以降なるべく遅い時期が適切であると想定した。また、調査卒業生は、大学院進学、企業等への就職が半々程度になるようにし、また、男女比が偏らないように計画した。ただし、第6期生までについて、21cp卒業生の大学院進学数/企業等就職数の比、および卒業生の男/女の比は、それぞれ、おおよそ1:1、および1:4である。

訪問による聞き取り調査は、調査対象者に事前回答を依頼したアンケート回答を元に、関連する事項を約30分程度インタビューする方式によって実施した。場合によっては、インタビューが1時間以上に及ぶケースもあった。

3. 調査結果

表に示すように、平成22年度までに12名の調査卒業生について調査を実施した。以下、これらの結果について、5点満点評価の結果、記述式回答の結果、およびインタビューによる聞き取りの結果について報告する。

表 訪問調査の調査卒業生の属性、調査対象者の所属機関および調査者

年度	卒業生属性	機関属性	対象者所属機関	訪問者	
18	2期生女子	大学院	東京大学大学院公共政策学研究科	副島・武谷・中里	
	1期生男子	大学院	(株)公共計画研究所		
	2期生男子	大学院	大阪大学工学研究科		副島・片山
	2期生男子	一般企業	NBC長崎放送		副島・武谷・中里
	1期生女子	公的機関	松山市教育委員会		副島・武谷
19	2期生男子	一般企業	ウェブスタッフ株式会社	副島・武谷・中里	
	3期生女子	大学院	琉球大学人文科学研究科	副島・田尾・中里	
20	1期生男子	一般企業	住友信託銀行	副島・武谷・田尾	
	2期生男子	公的機関	徳島県上勝町役場 徳島県上勝町教育委員会	副島・武谷・田尾・中里	
21	5期生男子	大学院	大阪大学大学院国際公共政策研究科	副島・田尾・石橋	
22	5期生女子	大学院	国立遺伝学研究所	副島・田尾	
	4期生女子	一般企業	NECグローバルリテール	副島・田尾・池山	

印は学務部の事務職員

3 1. 5点満点評価の結果

表 にすべての結果の一覧を示す。A～Lは調査卒業生個別について、それぞれの調査対象者からの回答を示している。表の上段は一般的項目Q1～Q20それぞれについての個別の回答、および調査卒業生ごとの平均値（平均1）と、項目ごとの平均値（平均2）を示している。同様に、表の下段には21cpに関連する項目Q21～Q30それぞれについての個別の回答、および調査卒業生ごとの平均値（平均3）と、項目ごとの平均値（平均4）を示している。また、全体の平均値は下段の右端に（平均）として示した。なお、「調査卒業生I」については、点数による回答が困難という理由で調査対象者からの回答を得られなかった。

表 5点満点評価の全体結果

[全調査]

質問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	平均1
A	5	5	5	4	3	3	5	4	5	5	4	4	5	3	4	5	4	5	5	5	4.40
B	4	3	4	4	4	4	4	5	4	5	3	5	4	4	5	4	4	4	4	4	4.10
C	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4.80
D	3	4	5	4	4	3	2	3	3	3	4	3	3	3	3	4	3	3	5	5	3.50
E	5	4	5	4	5	4	4	4	5	4	4	4	4	3	4	5	5	5	4	4	4.30
F	3	4	5	4	3	2	2	2	3	3	3	3	4	3	3	3	5	4	4	4	3.35
G	4	4	4	4	4	3	4	3	4	3	3	4	4	5	3	3	4	4	4	4	3.75
H	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3	3	4	3	4	4	4	4	3.80
I	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
J	5	5	5	5	5	4	4	3	4	4	3	4	4	4	3	5	5	4	5	5	4.30
K	5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4.35
L	4	5	4	3	3	4	5	3	5	4	3	3	4	4	3	3	3	3	3	3	3.60
平均2	4.27	4.36	4.64	4.09	4.09	3.73	4.00	3.55	4.27	4.00	3.55	3.82	4.00	3.73	3.73	4.00	4.18	4.09	4.18	4.18	4.02

質問番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均3	平均
A	4	4	5	5	4	4	5	4	4	5	4.40	4.40
B	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4.10	4.10
C	4	4	4	4	5	4	4	5	5	5	4.40	4.60
D	4	3	4	5	4	5	4	3	3	3	3.80	3.65
E	4	4	5	4	5	4	5	4	5	4	4.40	4.35
F	3	3	4	3	4	3	4	3	3	3	3.30	3.33
G	4	4	4	4	4	4	4	3	3	4	3.80	3.78
H	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3.90	3.85
I	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
J	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4.40	4.35
K	5	4	4	4	5	4	5	5	4	5	4.50	4.43
L	3	4	4	3	4	4	3	5	4	3	3.70	3.65
平均4	4.00	4.00	4.27	4.09	4.27	3.91	4.18	4.00	3.91	4.00	4.06	4.04

3 2. 記述式回答の結果

アンケートの記述回答については、この報告の末尾の資料 に抜粋して掲載した。詳細は、資料の細部を一つ一つ吟味する必要があるが、全体として、

- 1) 教育理念に関する視点からは、専門性が重視されがちな中で、敢えてゼネラリストの育成を打ち出し、また、この理念は21世紀型行政の構築に合致しているという評価、
- 2) 学生の自立性に関する視点からは、強いチャレンジ精神、主体性と柔軟性、問題発見能力など

- が強いと感じると言う評価、
- 3) 進学に関する視点からは、21cpのような教育システムが適する総合的な学問体系を学問分野や大学院があることの指摘、
- と言うような評価や指摘を得ている。また、
- 4) システムに関する視点からは、教育成果の検証を実施し検討・改善のため追跡調査を行うことへの評価、
 - 5) 名称がプログラムの良さを伝えきれていないのではないかとする指摘、
- が得られている。

3.3. インタビューによる聞き取りの結果

インタビューによる聞き取りの結果については、その代表的なものをこの報告の末尾資料 に掲載した。詳細は、資料の細部を一つ一つ吟味する必要があるが、これまでの訪問調査の結果、総じて、

- 1) 自ら行動を起こす意欲や積極性に長けている、
- 2) 学生時代に様々な分野の学修を行った点で、視野の広さや思考の柔軟性を感じる、
- 3) 問題点や課題を発見し、それを解決しようとする意識がある、

などの評価を受けているが、一方では、

- 4) 自己主張が強い分、周囲との協調性に欠けると見える部分がある、

との意見もある。また、

- 5) たとえば英語はネイティブのように会話でき、更にもう一つの外国語を自由に活用できるくらいは修得させて、21世紀プログラム教育の特色としてアピールしてはどうか、

などの貴重な提案も得ている。

4. 調査結果の評価

表 に示した5点満点評価は、何らかの数値表現を記録するために実施したものであるが、どの調査においても、一定の基準をもつような絶対的評価ではないことは言うまでもない。個々の調査対象者の感じ方、あるいは個々の調査卒業生に依存し、また、職種や専門分野にも依存するであろう。概して、多くの調査対象者からは、評価しようとしているものが調査卒業生個人のそのものの資質なのか、21cpで得られたものかは不明であるという意見が多い。これらの状況は、はじめから想定される尤もな反応である。しかし、資料 (アンケート用紙) の冒頭に示すように、「～貴社・貴部署(貴学・貴部局)の同期の人材の平均を「3」としたときの本人についての相対的評価を～」としているので、相対的に同世代の他の若者と比べて、ある程度は根拠のある評価を得られる可能性があることを期待している。

全体としては、一般的項目(Q21～Q20：平均値4.02)と、21cpに関する項目(Q21～Q30：平均値4.06)に、特に顕著な差異は見られない。このことは、例えば21cp学生が一般的項目として設定した資質に弱いと言ったような事実はないことを物語っており、また、21cpに関する項目が突出して優れているということもないことを示している。言い換えれば、調査の範囲内ではあるが、21cp学生が持つ資質はバランスの良いものであるとも言える。詳細な分析を行うことにどの程度

の意味（あるいは信頼性）があるかはよく議論しなければならないが、上述のように、相対評価にある程度の根拠があると仮定すれば、全評価点平均値が4.04であることは“同期の人材の平均「3」”を有意に上回っていることになり、バランス良く資質を備え持っていると判断できる。

表 に示した5点満点評価を、大学院進学者グループと企業等就職者グループ（公的機関への就職を含む）に分類してみた。その結果を表 に示す。それぞれの分類で、一般的項目と21cpに関する項目に、際立った差が見られないのは、上記全体平均と同様である。両グループの比較における最大の特徴は、大学院進学者グループに対して、企業・公的機関への就職者グループの得点が低いことである。これは、後者のグループの資質が相対的に前者に比べて低いということではなく、会社としての達成目標が明確で、周囲との競争にさらされた中での任務遂行が求められる後者では、調査対象者の評価そのものが“厳しい”ことを意味しているのではないかと予想する。

表 5点満点評価の分類 (上)：大学院進学者グループ (下)：企業等就職者グループ

[大学院進学者]

質問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	平均1
*	5	5	5	4	3	3	5	4	5	5	4	4	5	3	4	5	4	5	5	5	4.40
*	4	3	4	4	4	4	4	5	4	5	3	5	4	4	5	4	4	4	4	4	4.10
*	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4.80
*	4	4	4	4	4	3	4	3	4	3	3	4	4	5	3	3	4	4	4	4	3.75
*	5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4.35
平均2	4.60	4.40	4.60	4.20	4.20	4.00	4.60	4.20	4.60	4.40	3.60	4.20	4.40	4.20	4.20	4.20	4.20	4.40	4.20	4.20	4.28

質問番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均3	平均
*	4	4	5	5	4	4	5	4	4	5	4.40	4.40
*	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4.10	4.10
*	4	4	4	4	5	4	4	5	5	5	4.40	4.60
*	4	4	4	4	4	4	4	3	3	4	3.80	3.78
*	5	4	4	4	5	4	5	5	4	5	4.50	4.43
平均4	4.20	4.20	4.20	4.20	4.40	4.00	4.40	4.20	4.00	4.60	4.24	4.26

[企業等就職者]

質問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	平均1
*	3	4	5	4	4	3	2	3	3	3	4	3	3	3	3	4	3	3	5	5	3.50
*	5	4	5	4	5	4	4	4	5	4	4	4	4	3	4	5	5	5	4	4	4.30
*	3	4	5	4	3	2	2	2	3	3	3	3	4	3	3	3	5	4	4	4	3.35
*	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3	3	4	3	4	4	4	4	3.80
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
*	5	5	5	5	5	4	4	3	4	4	3	4	4	4	3	5	5	4	5	5	4.30
*	4	5	4	3	3	4	5	3	5	4	3	3	4	4	3	3	3	3	3	3	3.60
平均2	4.00	4.33	4.67	4.00	4.00	3.50	3.50	3.00	4.00	3.67	3.50	3.50	3.67	3.33	3.33	3.83	4.17	3.83	4.17	4.17	3.81

質問番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均3	平均
*	4	3	4	5	4	5	4	3	3	3	3.80	3.65
*	4	4	5	4	5	4	5	4	5	4	4.40	4.35
*	3	3	4	3	4	3	4	3	3	3	3.30	3.33
*	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3.90	3.85
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
*	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4.40	4.35
*	3	4	4	3	4	4	3	5	4	3	3.70	4.00
平均4	3.83	3.83	4.33	4.00	4.17	3.83	4.00	3.83	3.83	3.50	3.92	3.92

インタビューにおいては、多くの調査対象者が「21cp 卒業生の資質が21cp の4年間で培われたものなのか、あるいはもともと備わっていたものかの判断は難しい」と言うことであった。21cp の選抜試験に関わり、また、個々の学生の卒業に至る4年間を見続ける者の立場からこの疑問に答えるとすれば、「その両方です」と言うことになると考えている。すなわち、21cp のアドミッションポリシーを理解した受験生が21cp 学生となり、その理解を実践するカリキュラムを自律的にこなし、ディプロマポリシーが求める一定の資質を身に付けた者が卒業に至っているように見える。「そもそも在ったものが、磨かれている」と表現できると思う。

5. おわりに

21cp が初めての卒業生を送り出すことになった平成16年度（第1期生の卒業年度）には、卒業生の進路について多くの未知要素があり、関係教員は状況を不安とともに見守るという面があった。大学院進学においては、学士課程で専攻した学部出身者との競争による入学試験受験となることから、21cp 学生の合否についての不安要素、また、就職に関しては、21cp の知名度や教育理念の社会的浸透の面での不安要素があった。しかし、現在までに、この不安は不要であったという結果となっている。図1に、第1期生から平成21年度卒業（第6期生の卒業年度）までの卒業生の進路についてデータを示す。47%が大学院進学で、このうちの35%が九州大学以外の大学院（外国を含む）への進学である。一方、一般企業、公的機関への就職は46%となっている。21cp では、学生一人一人がそれぞれの専門性を目指して修学するため、大学院の専攻や、就職先業種はさまざまである。なお、就職活動を行っている学生から、従来は就職活動のエントリー作業では所属欄に「その他」としか回答できなかったが、数年前から「21世紀プログラム」欄を設定してくれている企業が現れ始めたとの報告や、他大学の大学院入試では、21cp についての情報を持った面接教員がいるなどの報告もあり、21cp の社会的認知度が高まっていることが伺える。

「専門性の高いゼネラリスト」の育成を目指す21cp の成果を測定するには、専門性の獲得状況とゼネラリストとしての素養の両方を同時に計測できる物差しが必要である。このような物差しは、現実に21cp 卒業生を受け入れた社会（大学院、企業等）が、それぞれに独自に行う測定結果を収集し、統合していくことによって準備できると考える。特に、冒頭に述べたように、挑戦的な学士プログラムを実施している21cp にとって、その教育成果を明らかにすることは社会的責任であり、このためには、卒業生の追跡調査の実施は必要不可欠であると捉えている。この報告にまとめたこれまでの結果は、今回実施した自己点検・評価および外部評価の一つに材料になったことは言うまでもない。（これに加えて、外部評価委員会では卒業生3名を招集し、各学年からそれぞれ1名の在 student とともに、外部評価委員によるインタビューを実施した。）

これまでの調査の結果は外部からの声として受け止め、毎月開催している21世紀プログラムワーキンググループ（21cpWG）で適宜話題として取り挙げてきている。21cpWG では、21cp の授業運営、修学・学生生活指導、入試補助など、21cp 運営の全般にわたって協議を行っているため、成果についてはそれらを更に向上させていくための方策を検討し、課題についてはそれらの原因を探り改善の方法等を議論する際に、追跡調査の結果は重要な根拠資料となっている。このような協議と議論を通して、現在および今後の21cp 教育内容や実施体制の改善を行い、これらの改善が21cp

在学生の教育改善に還元されている。

アンケート調査のみを単独に実施した場合に比べ、ここで報告した調査方法は、アンケート回答の意図や位置づけを直接聞きながら確認できるため、調査結果そのものの信頼性や質を高めることができていると思われる。また、これに加え、調査を通して多くの波及効果が得られたことは想定外であった。

一つは、訪問調査に可能な限り21cp に関与している事務職員（現在は21世紀プログラム課程係）に同行を依頼していることである。卒業生の調査であるにもかかわらず、過去にどのような卒業生が在籍し、今どのように活躍しているのかを直接目で見ても肌で感じることは、事務サイドからの在学生の修学支援やさまざまなケアに役立つと思われる。また、調査対象者の声を直接聞くことによって、21cp がどのようなところで、どのように評価されて（あるいは感じられて）いるかを、教員との共通認識として理解しておくことは、21cp の運営に極めて有効にはたらくものと期待している。このような共通認識としての教職協働の理解は、教員が見聞してきたものを、その報告書等を事務員が読むことによっては決して得られないであろう。実際に、21世紀プログラム課程係には、頻繁に21cp 在学生が修学に関する質問や相談を持ち込むが、その際には、事務職員が過去の事例や対応例を、卒業生の素顔とともに伝えられている。このことは、21cp 在学生の修学支援に、直接目には見えないが大きな効果をもたらしているものと思われる。参考として、同行した事務職員が調査報告書に記した感想の一部を末尾の資料 に示しておく。

もう一つは、追跡調査を行うことによって、卒業生の進学先や就職先とのつながりが増えることである。21cp が10年を経たことに関連して、平成24年度は、過去に訪問調査に対応した調査対象者を非常勤講師に迎えた課題提示科目「次代を拓く」の開講を計画している。やや特殊なケースの課題提示科目となるが、第一にさまざまな分野で21cp 卒業生との関わりを持って活躍している講

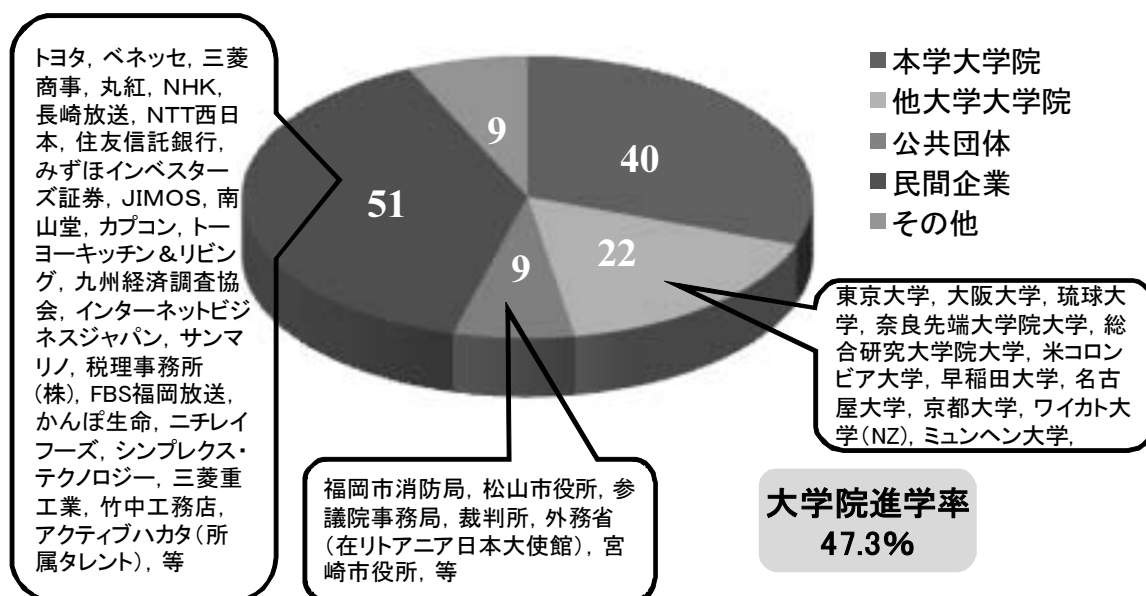


図1 21cp 卒業生の進路状況 (第1期生～第6期生)。円グラフの数値は人数を示している。

師を招へいできること、第二に講師自身が卒業生を通して21cpの理解者であること、また、第三に講師の経験や価値観を通して、21cpの先輩の姿を後輩である在學生に感じ取らせることができることなど、多くの効果を期待している。このような企画が可能であるのは、訪問調査によって実際に多くの調査対象者と面識を持ったことによる。21cpからの講師依頼の呼びかけに対して、可能な範囲で応諾を得ており、また、次のようなメッセージ等も寄せられている。抜粋してその例を示す。

[ある会社役員から]

先生とお目にかかって以降、**君の立場にずいぶん変化がございました。今、彼は、弊社のパートナー企業である中国のIT関連会社との折衝窓口を担当してくれております。弊社として初めての海外関連事業でありますから、会社としての経験値は皆無、かつ主張の強い中国の国民性も相まって、弊社の他の業務ポジションとは比べものにならないレベルの困難さを伴う重要な任務です。その任を、彼らしく、表には出さないものの内々に熱いものを滾らせながら、しっかりと務めてくれております。その姿は私の手本でもあり、また支えにもなってくれております。

[ある大学教員から]

貴学21世紀プログラムで学び、私のもとで修士論文を書いた**さんは、お世辞抜きに大変な力作を提出してくれました。未開拓なテーマである近代沖縄大衆芸能史を、新資料を駆使してまとめてくれたのです。卒業後、すぐに地元を代表する旅行代理店に就職し、今はツアーコンダクターとして活躍しています。... 貴プログラムの益々の展開を念じつつ。

この調査は、今後も実施していく予定である。今後の実施に当たっては、

- 1) 調査件数および調査卒業生の選定が適正か、
 - 2) 調査内容（質問項目等）に改良の必要はないか、
 - 3) 調査結果の分析をどのようにどこまで進めるか再検討が必要ないか、
 - 4) 調査から得られる知見を、具体的に21cpの改善にどのように活かし、また学生の修学指導や学生支援にどのように活かすべきか、
- などについて、更に検討を継続する必要があると考えている。

謝 辞

この調査は平成18年度から平成22年度までの5年間の結果のまとめである。表に示すように、調査の初期では、武谷峻一名誉教授、片山繁樹氏、中里利子氏の参加協力を、また、平成21年度からは、石橋千嘉氏（学務部全学教育課21世紀プログラム課程係長）および池山真由美氏（同係事務職員）の参加協力を得ながら実施している。ここに謝意を記す。

[資料] アンケート用紙

アンケート用紙

下の30項目について、貴社・貴部署（貴学・貴部局）の同期の人材の平均を「3」としたときの本人についての相対的評価を（ ，レなどで）ご記入ください。

No.	内 容	劣る			優れる	
		1	2	3	4	5
[I] Q1 - Q20 一般的な項目						
Q1	積極的に物事に取り組む意欲					
Q2	粘り強く物事に取り組む態度					
Q3	修得した学問・知識を活かして物事に取り組む態度					
Q4	与えられた枠組みを超えて創造的に物事に取り組む態度					
Q5	知恵を使ったり工夫して物事に取り組む態度					
Q6	自分の考えを人に伝える能力					
Q7	周りの人と協調して物事に取り組む態度					
Q8	リーダーシップ					
Q9	責任感					
Q10	議論する能力					
Q11	企画する能力					
Q12	時代の変化を察知する能力					
Q13	社会についての関心					
Q14	人間についての関心					
Q15	文化・芸術について関心					
Q16	健康・スポーツについての関心					
Q17	外国語能力					
Q18	国際感覚					
Q19	情報処理能力					
Q20	専門分野の知識と理解					
[II] Q21 - Q30 21世紀プログラムに関する項目						
Q21	特定の専門分野に関する専門性					
Q22	専門外の分野についての知識や見識の幅広さや深さ					
Q23	問題発見・課題発見に対する能力					
Q24	問題・課題の解決に取り組む能力					
Q25	問題・課題の解決に臨む意欲					
Q26	知識や経験を道具として使う能力					
Q27	未知の物事に取り組もうとする意欲					
Q28	議論を通して自分を発展させる姿勢					
Q29	議論を通して新しい展開につなげる素養					
Q30	自分の殻を破って外に出ようとする姿勢					

[Ⅲ] 可能な範囲で記述ください。

(1) 引き続き九州大学21世紀プログラム学生が貴社・貴部局に入社などの応募をした場合、関心を持たれますか。持つとすれば、どのような点に注目されますか。

(2) ご自分の家族、親戚等の方が大学入試をお考えのとき、九州大学21世紀プログラムを視野に入れてみたいと思われませんか。

(3) その他の印象や意見がありましたら記述ください。

ご協力ありがとうございました。尚、このアンケート用紙は当方訪問時にお渡しいただければ幸いです。

九州大学21世紀プログラム

[資料] アンケートの記述回答例 (表現は簡略化している)

- (1) 引き続き九州大学21世紀プログラム学生が貴社・貴部局に入社などの応募をした場合、関心を持たれますか。持つとすれば、どのような点に注目されますか。

[教育理念に関する視点]

- ・大学での多様な興味分野から、自分の専門分野をどのようにして確立させていくかという点は興味深い。
- ・21世紀プログラムの教育目的は「21世紀型行政の構築」に合致しており、このプログラムは時代の要請にかなったシステムであると感じる。
- ・社会のシステムが年功序列から成果主義へと移行し、専門性が重要視される中、あえてゼネラリストの重要性を謳うこのプログラムは魅力的だと感じる。
- ・仕事では、環境・情報・国際関係が重要なポイントであり、その部分を身につけた人材は有望であり、その中で、専門的な方向性を見つけて行くことが良い。

[自立性に関する視点]

- ・チャレンジ精神が強いと感じる。
- ・主体性、適度の柔軟さを持っている点に興味を持つ。
- ・最近の学生に欠けている‘自分で’のスタイルを培う環境があるように見える。
- ・どのようなテーマに関心を持ち、どれ位幅広く学んできたかと言う点に関心を持つ。
- ・学外の活動、何をどれだけやってきたか、机上の知識だけでは得られないものを学べると感じる。
- ・4年間一つのテーマを学んで、どのような「答え」を導き出したいか。その独自性も含めて思考の柔軟さを感じる。
- ・学部時代に身につけた学問の幅の広さに関心を持つ。様々な背景を持った学生が集まっており、各自の特徴を最大限に活かしている。
- ・問題を見つけ出す力、他者の視点を認める力、他者の視点を自分のものにする力を持っているか否かに関心を持つ。
- ・自らを磨くために、自らの関心で修行するというコンセプトを内包する人間性に着目する。その基盤力が備わっていれば、具体的なテーマや方法を見定めた時、大いにはばたくと期待できるからである。

[進学に関する視点]

- ・21世紀プログラムのような教育システムが最適な学問分野や大学院はある。
- ・総合的な学問体系を持つ大学院が種々ある。そのような大学院に目を付けて進学していると感じる。

[システムに関する視点]

- ・名称がプログラムの良さを伝え切れていないのでは。
- ・教育成果の検証を実施し検討・改善のため追跡調査を行うことはすばらしい。

(2) ご自分の家族、親戚等の方が大学入試をお考えのとき、九州大学21世紀プログラムを視野に入れてみたいと思われませんか。

-
- ・条件付で視野に入れる。例えば、21cp は英語に加えてアジア言語に力を入れるなど、もっと特徴を出せばよい。
 - ・本人の自主性、自立心があれば検討する。これがないと、21cp では埋もれてしまうだろう。
 - ・大学院まで進学する気があるかどうか。大学院に進んでその意義が有効に働くと思うから。
 - ・21cp では、自ら興味・関心のある程度絞り込めることのできる人材でないと、システムの利点を活用することは難しい。
 - ・社会のシステムが年功序列から成果主義へと移行し、専門性が重要視される中、あえてゼネラリストの重要性を謳うこのプログラムは魅力的だと感じる。
 - ・自分なら興味を持つ、刺激に溢れているように感じる。
 - ・大いに学びたいが、まだテーマや課題・分野がはっきりしていない若者に勧めたい。
 - ・視野に入れてみたい。研究あるいは学問のテーマを自由に選択し、かつ深いレベルまで極める環境は重要な教育の要素である。
 - ・理念、目標に対しては共感する。家族や親戚にも紹介したい。
 - ・大学選定の時点では大半の人が自分の適性を分かっておらず、社会に出てから適応できない人が多い。「文系理系統合による学部横断型」は次の可能性を見出すために大変有効なプログラムである。
 - ・自主的な修学関心を尊重させる教育は、自ら自分の役割を見つけ、その役割を果たすためのスキルを身に付けようとすることができる有効な方法である。

(3) その他の印象や意見がありましたら記述ください。

-
- ・ジャーナリズム等に関する徹底的な授業などは、21cp に向いているのではないか。
 - ・いろいろな専攻分野から大学院生が集まってきている学問分野や大学院は多数ありうる。そのような分野に対して21cp は向いているのではないか。
 - ・いろいろなことを器用にこなすと言う印象がある。計画性や計画力に優れているのは、21cp の修学形態の成果ではないか。
 - ・競争意識があまり無いと見受けられる。21cp では個々の考えが主体で、他のものと競争する必要が無いからではないだろうか。
 - ・「広く浅く」が必要とされる職種がある。21cp はそのような職種に適しているのではないか。
 - ・仕事の現場で、課題を見出し自らの力でその解決策を探っていく姿勢が強いと見受けられる。1 を伝えれば10 を察する能力に優れている。
 - ・仕事の過程でいろいろな疑問を見出し、より良い方法を見出そうとする姿勢がある。逆に言えば、素直に言われたことだけをやるのではなく文句が多いということになるが、このような姿勢は社会人として大変重要で将来性に期待するところが大きい。
 - ・非常に興味深い教育をしているとの印象を持つ。
 - ・この取り組みの成果を経て、他の大学でも同様な取り組みを行って欲しい。ただし、その際には、専門性の高い学部・学科との差を、誤解なくどう正しく周知するかが難しい。
-

[資料] インタビューによる聞き取りの結果 (抜粋：表現は簡略化している)

- ・21cpの「課題発見能力」,「問題解決の案を提示する能力」,「国際的視野」,「コミュニケーション能力」等は,まさに,21cp学生が選抜入試から入学後に履修する独自科目としての「課題提示科目」,「プログラム・ゼミ」等の必修科目に加え,留学の推奨制度などでしっかりとした基礎作りされている。それらの基礎は,****大学院が目指している能力に,つながるものだと言えるのではないだろうか。
- ・本人の素質が,或いは21cpへ入学して培われたものか分からないが,非常にリーダーシップがあり,人間関係への配慮も行き届いている。また,何事にも積極的である。****大学院は100名の定員の内,1/3が東京大学からの進学者,2割が社会人経験者であるため,彼が橋渡しの役割を担っているし,同僚も頼っているところがある。本人は将来地方に戻り,政治家を志望しているようだが,現在,***受験に向けて努力をしている。来年度も21cpからの入学予定があるが,先輩の活躍が大いに影響しているように見える。
- ・21cpについては全く知識がなかった。専門性の高いゼネラリストを養成するというカリキュラムには大変興味を持っている。大変おもしろいプログラムとは思いますが,自分の言葉で問題を絞り込める人でないと難しいのではないかと。また,自分の入学してきた目的,経緯を説明出来るようになることが大事だと思う。
- ・長年面接試験を行ってきて,確実に「問題発見能力とその解決能力」の点において若者の意識や力量が低下してきていると思う。指示待ち社員ばかりでは会社の活動はもちろん,社会活動も成り立たなくなる。卒業生**君にはその面が秀でている印象を持っており,**君の力もあるだろうが,21cpの教育方針の成果でもあると受けとれる。この意味で,21cpが尚成果を上げていくように,規模の拡大(学生数の大幅な増加)を期待してやまない。
- ・卒業生**君は,大学院の面接では進学者の中で最も評価が高かった。幅広い問題意識を持っており,既存の学問分野にとらわれていないところが評価された。この評価は大学院入学後も変わっていない。入学後は,指導教員に頼らず出かけて行く積極性・行動力を発揮している。離島に出かけ伝統織物の職人に話を聞き,さらにそこで他の職人を紹介してもらい話を聞きに行くというような,指導教員が驚く積極性・行動力を発揮している。これは21cpでの自主性を重んじた教育プログラムが効果的であったためだと考えられる。研究室においては,リーダーシップを発揮することを期待されている。
- ・このような町の公務員にはオールマイティな人材が求められる。種々の仕事が求められるので,種々の知識や経験,幅広い理解力が重要となる。その意味では,九州大学21cpのような教育プログラムは重要だと思うが,最終的に何も身につかなかったという虞があることは危惧する。

[資料] 追跡調査に同行した事務職員の感想 (抜粋：表現は簡略化している)

- ・ **先生は超多忙なスケジュールを割いて、面談に応じてくださり、簡潔なことばでの確な指摘をされる口調はさすが、第一線のコラムニストという印象であった。 **大学院が目指している能力の中にある、「課題発見能力」、「問題解決の案を提示する能力」、「国際的視野」、「コミュニケーション能力」等はまさに、21cp 学生が選抜入試から入学後に履修する独自科目としての「課題提示科目」、「プログラム・ゼミ」等の必修科目に加え、留学の推奨制度などでしっかりとした基礎作りした後に、進学するに相応しい大学院と言えるのではないだろうか。
 - ・ 本学の21cpの「さまざまな知識を組み合わせるような創造的な能力を備えた人材育成」や「ある領域については専門的な知識を有しながら、同時に関連したさまざまな専門領域を横断し、それらを広範囲な視点から有機的に総合するようなリーダーシップを発揮する」という基本的な考え方と、 **大学 **研究科 **専攻の人材育成目標である「異分野融合・連携を含めた新しい工学的研究開発から経営学的戦略構築を行い、技術知を用いて社会や経済の活性化に貢献できる人」とを比べると、人材育成や、教育方針等、合致する部分が非常に多く、まさに本学が目指す21cpの大学院版ではなからうかと驚かされた。と同時に **君が自分の進路を21cp でやってきたことと確実に結びつけていっていることに感心した。

また、今、社会が何を必要としているか、これから何が必要とされるかを的確な判断の下に把握し、それを専攻分野と経営学を連携させている所や、ダブルディグリーを可能としている点は、本学がこれから進めようとしている教育改革の観点から非常に参考となった。
-